

# 「あるユダヤ国家」翻訳付記 十字架の新しい意味

童子丸 開

最近私はイズラエル・シャミールの著作”A Yiddishe Medina” ([あるユダヤ国家](#)) および”The Tyranny of Liberalism” ([リベラリズムの暴政](#)) の日本語訳を彼自身のサイトに寄稿した。これらは同時に日本随一の硬派雑誌、[季刊『真相の深層』誌](#)に連載で掲載されている。また日本語ウェブ・サイト [阿修羅](#)でも紹介されたものである。”A Yiddishe Medina”の原著は2001年9・11のやや後に著されたものだが、この文章に対する私の自身の考察をその日本語訳に添えておきたいと思う。

シャミールはこの”A Yiddishe Medina”を「私の論文の集大成である」と語っているが、この作品は決して単なる「ユダヤ・イスラエル批判」でも「アメリカ批判」でもない。私は、ユダヤ-アメリカ (Judeo-American) 文明の姿をありのままに見つめながらそれが放つ猛毒の正体を見極めてそれを中和する道を探ろうとするシャミールの冷徹な眼を、そこに感じる。彼の著作活動は未来の人類の生存を支える新しい文明を手探りで見つけていくとする大胆かつ繊細な作業である。

同時に、彼が我々に示すユダヤ人の悪徳の多くは我々日本人も今までに発揮してきたものであり、またもしチェックを受けなければ、世界の誰によってもいつでも発揮されうるものであろう、と思う。この点を見落とすなら単にユダヤ人や米国人を悪魔化して世界の悲劇をより大きくしてしまうだけに終わることだろう。悪魔化し神話化して復讐を叫ぶ主体こそが本当の意味で悪魔的なのだ。人間は誰でも悪魔になる可能性を持っている。本稿ではこの悪魔化の作業がどのようなプロセスを経て確立されるものなのかについて、非常に簡単にだが、論考を行ってみたいと思う。考察の対象となる実例として、シャミールが「あるユダヤ国家」を書く直接のきっかけとなったあの有名な事件、我々にとって実に貴重な教訓である9・11事件を採用しよう。そしてその上で、未来にあるべき共存共栄の文明、彼の言う「十字架の新しい意味」を探していくきっかけとしていきたい。

## 復讐

2001年の9・11後に書かれた「あるユダヤ国家」の中で、シャミールはユダヤ教に染み込む強烈な毒素である復讐の分析から始めるのだが、私にとっては、この作品を読むはるか以前から、「復讐」という言葉を聞いて最初に思いつく国はやはり米国であった。

米国が奇妙な「奇襲攻撃」の後で復讐熱に駆られて戦争に突入してきた歴史を持っていることは広く知られている。「リメンバー・アラモ!」「リメンバー・ザ・メイン!」「リメンバー・パールハーバー!」そして「リメンバー・9/11!」。米国史のメイン・イベントは復讐によって貫かれている。現在多くの人によって語られ、また米国とシオニスト=ネオコン指導部自らがPNACを通して予告していたように、[9・11は新たなパール・ハーバー](#)であった。

「我々は被害者だ!!だから!!復讐しなければならない!!」その当時、私はどうして米国人たちがあらゆる理性的な筋道を捨ててこのような論理に突っ走るのかの理由を理解できなかった。だがシャミールが言うように米国は「復讐のメシア」に身を委ねる「ユダヤ国家」であるとすれば筋が通る。つまりわが国はロウズベルトの罠にはまり復讐のメシアが牙を剥く対象にされてしまったというわけだ。その結果がヒロシマとナガサキであった。

私は「あるユダヤ国家」を読むまでは新旧の聖書を通してしかユダヤ教を知ることは無かったが、確かに旧約聖書は選民主義・排外主義と他民族の文化や宗教に対する敵意に彩られており、ユダヤの神は異教徒の絶滅を命令する。また新約聖書の中で最もユダヤ的と言われているヨハネ黙示録は「迫害者に対する復讐」の精神で溢れている。巧みにキリスト教にすりかえられてはいるが、黙示録は「選民」以外のあらゆる人間の絶滅と地獄への追放を希求する恐るべき精神で貫かれているのだ。私のような仏教と神道の文化に育った人間にとっては到底理解できるものではない。

言うまでも無いことだが、復讐の心は決してユダヤ人や米国人の専売特許ではなく、ど

の民族の誰にも共通して存在するものである。我が日本ではつい百数十年ほど前まで復讐は支配階級の構成員達にとっては義務ですらあった。それは地中海諸国の民族でも幅広く見られた。また昔の中国人たちは政敵を殺害する場合に復讐を恐れて一族郎党を皆殺しにした。さすがにユダヤ人のように「メシア」までは想定しなかったものの、世界中のどこでも被害者が加害者に対して復讐することはむしろ当然とされてきた。

しかしこの「ユダヤ国家」の復讐は、エドモン・ダンテスや赤穂浪士とは異なり少々話が込み入っているようだ。ここに悪魔化の作業とそれを一つの神話体系にまでまとめているプロセスが絡んでいる。これについてもう少し考察を重ねてみよう。

## 悪魔化

シャミールは世界を破滅に追いやりかねないユダヤ人の行動の一つとして悪魔化を取り上げている。しかしこれもユダヤ人だけの特技ではあるまい。現に日本人は数十年前に米国人と英国人を「鬼」「畜生」と見なしたのである。しかしそこまでさかのぼる必要もあるまい。我々はずいぶん数年前に米国と世界で行われた悪魔化と神話作りのプロセスを具に観察することができた。これは実に貴重な経験である。そこで悪魔化されたのは「イスラム＝テロリスト」なのだが、ここでその作業の様子を整理してみたい。

悪魔化を行う者たちはまず一切の理性的な筋道を消し去ってしまう。実例として未だに米国人の多数派が信じていると言われる9・11の解説を覗いてみよう。素晴らしい！

- まさに驚きである！ たとえ、
- (1) 物理法則と矛盾しておろろうが (WTC倒壊の仕方！)、
  - (2) 起こるはずの無いことが起ころうが (1万メートル上空からの携帯電話！)、
  - (3) あるはずのものがなかりょうが (ペンタゴンとペンシルバニアでの飛行機の残骸！)、
  - (4) 無いはずのものがあるろうが (ペンタゴンCリングのパンチホール！ WTC跡地で発見されたテロリストの無傷のパスポート！)、
  - (5) やってはならないことが行われようが (物的証拠の即時廃棄処分！)、
  - (6) やらねばならないことが行われてなかりょうが (ニューヨークとワシントン上空の防空体制の消滅！)、
  - (7) 不可能なことが可能になっていようが (素人パイロットによるジャンボ旅客機の天オ的操縦！)、
  - (8) 一切お構いなし！！

挙句の果てにこうである。「9／11の背後に陰謀があったとしても、そんなもの知ったことじゃない！」 ([ノーム・チョムスキー](#))

少しでも理性を持ってこれに疑問を表する者は「陰謀論者＝人類(?)に対する敵」と見なされ、「テロリスト＝悪魔」の一味としてバージされる。こうしてあらゆる理性的な筋道が消し去られる。

次に悪魔化の対象と復讐の主体が個人から集団へと拡張される。悪魔化されるの対象は、テロリストとされた個人あるいは「アルカイダ」と呼ばれるテロ集団にとどまらず、その同調者(と指名された個人や集団)、さらには人類中の特定の構成員、9・11でいえばイスラム教徒全体にまで、そう望まれるときにはいつでも拡張できるという点である。こうして彼らに「テロリスト」の集団的罪を負わせ、世界中のどこでもおっぴらに「我々の復讐」の対象とすることが可能になるのだ。

我々は、この悪魔化という作業が誰によって誰に対して為されようとも、一つの社会によって他の社会と文化を破壊しその民を支配する意図によってそれが貫かれることに注意しなければならない。悪魔化は他への攻撃と征服の重要な方法論なのだ。そしてこの作業は次に挙げる神話作りを通して完成される。

## 神話

ほんの数十年前まで、日本人は「天皇は天から下って来た神の子孫、したがって日本は神の国である」と信じ込まされていた。もちろん日本人の全員がこの馬鹿げた作り話を信用していたわけではないが、その結果我々は多くの国々できわめて多くの人々の命を奪い無数の生活を破壊した挙句に自国をも破滅に追いやったのである。

今となってはこの下らぬ神話を笑うことは簡単であろう。しかしそれを笑う多くの人々が

別の神話の虜にされているとすればもっと大きな問題である。神話に取り付かれた民の運命は日本の歴史が暗示しているのだ。

現在問題となっている神話は、日本神話とは逆に、神ではなく**悪魔が主人公の物語**であるようだ。9・11の**神話作りのプロセス**を徹底して調査・暴露・記録する作業は貴重な歴史的教訓であり我々の世界の将来にとって根本的な重大事である。ここに、それがどのように行われたのかを簡単にまとめておこう。

- (1) **徹底した物理的証拠の隠滅**：WTCビル跡地やペンタゴンにあった**犯罪の物理的証拠**のほとんどが米国とニューヨーク市の当局者によって短期間のうちに消し去られた。
- (2) **徹底した情報の隠滅**：莫大な量のビデオ映像と写真がFBIによって押収され、航空管制官へのインタビュー録音テープが破壊された。
- (3) **徹底した科学法則無視**：WTC崩壊の様子を全く説明できない「重力による垂直崩壊」や墜落した飛行機が「微粉末になって消える」といった**偽科学**がメディアと出版によって大規模に宣伝された。
- (4) **徹底した偽情報によるミスリードと悪魔化**：大小のメディアと出版によって、何一つ具体的な証拠の無い「**イスラム・テロ**」情報が、世界中に、一斉に、大量に、繰り返され、それが世界の人間を洗脳し続けた。
- (5) **疑惑を封じるための徹底した恐喝**：メディアと幅広い分野の評論家たちが公式論を疑う者に「**陰謀論者**」のレッテルを貼って脅迫し孤立させ、各職場や学校や団体の中で疑惑の声をつぶす巨大な圧力が作られた。

こうして「**イスラム＝テロリストの9・11神話**」が形作られたのである。この神話の働きによって、米国に対しては「**何をしても許される**」**特殊な地位**が与えられ、実体の解らぬ「**アル・カイダ**」に関わると見なされた者には「**何をされても構わない**」という**特別な意味**が付与された。米国人の多数派は未だに理性的で幅広い視点からあの事件を**客観化・相対化**してとらえなおすことを拒否している。

そしてその間に米国の「**復讐のメシア**」はアフガニスタンとイラクで数十万人の生け贄の血をすすりその**文化と社会を破壊**してきたし、今後もまた無数の血の味に酔い痴れることだろう。また数多くの**無実のムスリム**たちが**謀略によって逮捕され嵌められて命を落とした**。**西側世界**では、飛行機で、電車で、街角で、**インターネット**で、そして生活のあらゆる場所で、**ビッグブラザーの目**が光る。**ファシズムが偏在化**しつつある。今後もそれらのことが続けられるのだろう。**9・11神話**を維持するためである。

各国当局者とメディアによって作られた神話の一部はもうすでに**当局者自身の手によって放棄されてしまった**。また**作業員の間抜けな失敗**によって「対テロ戦争」の虚構の一部が暴露された。

しかしいろいろなほころびを見せながらも**9・11神話**は顕在である。何よりも重要なことは、**客観的な科学法則の無視**が世界を一気に**ガリレオ以前**に引き戻してしまった点であろう。未だに多くの人々が、素人がジャンボ機を魔術のように操り、粉々になったWTCからテロリストの無傷のパスポートが見つかり、飛行機が残骸を残さず墜落したようなことに、**疑問を感じる**こと**自体を拒絶**するのである。特に**科学者達**がそのような態度なのだ！これは地球の公転を拒絶するよりもはるかに低級だろう。**実際に垂直崩壊したのはWTCタワーではなく人間の頭脳であった**。

このようにして、**悪魔化と神話作り**が全世界に向けて**実況中継**されたのである。今まで伏せていたのだが、この**悪魔化と神話作りの主語**は言うまでも無く「**対テロ戦争**」を**リードする者達**である。彼らこそが9・11事件の真犯人に間違いあるまい。そしていずれは、彼らにとって9・11事件は**大成功**であったと同時に**大失敗**であったことが明らかにされるだろう。自分の手の内を明かしてしまったのだ。

## 十字架の新しい意味

私はこの論考の最初に『彼の著作活動は未来の人類の生存を支える新しい文明を手探りで見つけていこうとする大胆かつ繊細な作業である』と述べた。シャミールは「あるユダヤ国家」の中で次のように言う。

.....  
我々は4つの傾向の合成を捜し求める必要がある。自然の生物的で本来的な愛情、地域

的なルーツと伝統、あらゆる人間のための社会共同体的な正義、人生への愛と起業家精神である。それに深い精神性が加わる。それらは十字架の新しい意味を表現するだろうし、人類に精神の一致をもたらすだろう。美しい多様性を同時に保ちながらである。

もちろんその前に現在のユダヤ-アメリカ文明が今後も存分に発揮してくれるであろう『人間の悪徳の見本』をじっくりと研究し分析し記録し続けなければなるまい。仏教は我々に人間の持つ悪徳を「貪瞋痴」の三つに分けて教える。これを「三毒」という。「貪」は食欲であり他者を利用し押さえつけ排斥しながら自らの欲望を膨らませていく浅ましきである。「瞋」は瞋恚、憎悪であり嫌悪であり復讐の念であり、これもまた正のフィードバック作用を引き起こして際限無く膨張していくものである。そして「痴」は愚痴、愚かさであり傲慢さであり、客観的で理性的な筋道と同時に主体的で細やかな感情をも切り捨て、自分だけの視点に閉じこもって他者を理解し受け入れることを拒否する精神の墮落を指す。先ほど簡単に分析してみた復讐、悪魔化、神話作りの中に、この全てが絡み合っている姿を見て取ることができる。

私は未来の人類の生存を支える新しい文明とそれを支える精神、シャミールの言う「十字架の新しい意味」を探り当てていく作業に、日本人を含むアジア人の参加は必要不可欠であると思う。ヨーロッパ文明の何倍もの歴史と幅広さと奥深さを含み持つアジア文明こそがその主体を担う必要があるのではないか。

この論考の最後に、一つの素敵なイメージを提示しよう。京都の清水寺の境内に地主神社（じしゅじんじゃ）がある。江戸時代までは神社と仏教寺院が並存する形態は当たり前であり、僧侶が神主を兼任することすらあったという。さてこの地主神社だが、その名前が示すとおり主祭神は清水寺の敷地の「地主さん」なのだ。1500年ほど昔、仏教が日本に伝来したときには、日本の神々と新来の仏達の間には少なからぬ紛争があった。しかしやがて神々と仏達は素晴らしい解決方法を編み出した。神々は土地のオーナーであり仏達はテナントとして居住契約を結んだのである。仏教と共にやって来たインドの神々も、その凶暴さを発揮せず福德をもたらすという約束の元で、日本の神々の準会員として迎え入れられた。

我々は「神仏分離令」が發布され神社と仏教寺院が切り離されて以後に日本が帝国主義の道を歩み始めたこと、そして神道が選民主義的な天皇神話と結び付けられて外国人と日本人に大災厄をもたらした歴史を、決して忘れるべきではない。